

# チャールズ・ウェスレー 生誕300年を迎えて

## チャールズ・ウェスレー生誕三百年を覚えて

院長 深町正信

チャールズ・ウェスレーはオックスフォード大学で、兄ジョン・ウェスレーの始めた信仰復興運動に参加し、讚美歌作家として絶大な役割を果たした。すなわち、英国社会の激動期に悩んでいた多くの人々の心を救ったのである。このメソジスト運動とチャールズについて若干述べてみたい。

チャールズは兄のジョン・ウェスレーと共に当時色々な面で墮落していた英国国教会の中にいて立ち上がり、兄弟で力を合わせ、メソジストの仲間と信仰復興運動を始めた結果、英国国教会を内部か

ら改革することになった。彼は兄ジョンを中心とするメソジスト信仰復興運動のエバンジェリスト（伝道者）として、特に讚美歌の創作に励んで、福音の真理を分かり易い言葉と、調子の良いメロディにして人々の心に深く響かせ、信仰の心を奮い起こしたのである。兄ジョンはその生涯において約四万回の説教を各地で行っている。他方、弟チャールズはその生涯で約六千五百とも言われる讚美歌を創作し、産業革命の社会変動により、多くの迷える大衆の魂に訴えたのである。チャールズはと

ても愛情深く、気の優しい、繊細な感受性の持ち主であった。父親サムエル譲りの詩人としての豊かな資質にも恵まれていたようで、素晴らしい数多くの賛美の歌詩を生み出し、今日に至るまで世界の教会で、多くの

人々に愛唱されている。

チャールズの回心は、兄ジョンのアルダスゲートの劇的、福音的回心の出来事の起こった一七三八年五月二十四日より少し早い、五月二十一日の日曜のことであった。彼はすでに兄と同様に英国国教会の教職に就いて十二年を経ていたが、なお自分の罪に深く悩み、苦しんでいた。彼の日記によると、彼は肋膜炎を患って、重症の病床にあったとき、チャールズが死んだという誤報が周囲に流れたことを知る。彼の魂は自分の罪の重荷に苦しみ喘いでいたので、「それが本当であれば、自分はどうなるに幸福であるうか」と述べている。しかし、回心の日、彼の病床を見舞いに訪れたある婦人の言葉と、親友のブレイが選んでくれた詩編三十二編一節の「いかに幸いなことでしょうか 背きを赦され、罪を覆っていただいた者は」という御言葉によって、チャールズはその心の中に救いの光りを見ることができたのである。

彼はその時、キリストにあって魂の闇夜から真昼へ移される経験をしたのであった。チャールズがその罪と死から救われた喜びを讚



の教会で、多くの

美歌の詩に創作したのが、今日の『讚美歌』六十二番の「主イエスのみいつと みめぐみとを、ことばのかぎりに たたえまほし」である。

この原文の英語讚美歌の初めの行には「千の舌をもって、賛美を歌うために」とある。それは、主の恵みの力強い業を、彼のすべての言葉をもって賛美しようという思いにあふれている。この讚美歌は一七七九年十月二十日に出た『ウエスレー歌集』の巻頭に置かれて以来、各国のメソジスト教会の讚美歌のトップの位置に置かれるようになった。かくして彼の讚美歌の詩にはキリストの福音により救われた爆発的な喜びと力が躍動し、「歓喜」がその詩歌の基調となっている。罪深い者がキリストの十字架によりその罪を贖われた喜び、キリストに救われた天国の喜びが、どの讚美歌にも共通して告白されている。

である。そして、チャールズの讚美歌は今も、新しく私たちの心に響き、キリストによる救いの「恵み」と「神の愛」を、聖書とともに証しているのである。

メソジスト信仰復興運動を考えると、弟チャールズの詩歌の力と、兄ジョンの多方面にわたる伝道活動とのいづれが優位であるかを決めることは無意味である。むしろ父なる神は、兄ジョンと弟チャールズの働きを分離するのではなく、両者を同時に豊かに用いられた、一つの運動として生かされたのである。両者はいずれも欠くことの出来ない、神の賜物の所有者であり、共に結び合って、英国国教会の改革とキリストの福音宣教の前進をもたらしたのである。

それゆえに、メソジスト信仰復興運動は大きな霊的うねりとなって英国から全世界へと拡大していったのである。メソジスト教会は米国では「Singing Methodist」とか「Singing Church」(シキヤ)、賛美する教会と呼ばれてきた。また、最近では「Folk Church」とも言われ、大衆伝道の最大武器として多くの讚美歌を会衆とともに歌うメソジスト教会もある。

## 讚美歌第二編二三〇番 『わが主を十字架の』 —チャールズ・ウエスレーの「アメイジング・グレイス」—

恵泉女学園大学名誉教授 大塚 野百合

ジョン・ニュートンの「アメイジング・グレイス」は、世界で愛されている名歌ですが、チャールズ・ウエスレーに、この歌に比すべきものがあるのです。讚美歌第二編二三〇番の「わが主を十字架の」です。この歌は教会でも余り歌われることがないのですが、驚くべき讚美歌です。

And can it be that I should gain  
An interest in the Saviour's blood?  
Died he for me? who caused his pain?  
For me? who him to death pursued?  
Amazing love! How can it be  
That thou, my God, shouldst die for me?  
Amazing love! How can it be  
That thou, my God, shouldst die for me?

「こんなことがありうるのか、私が主の贖いの血の恵みにあずかることができるのか？」

主は、私のために死にたもうたのか？  
主をお苦しめたこの私のために？  
主を死にまで追いやった私のために？

ほんとうに主は血を流されたのか？という深い疑問と、自分のような者を救いたもうた主の愛に対する驚きが述べられています。Amazing love! という言葉が二度繰り返されているのです。ところが第五節で、彼は疑念に

何と驚くべき愛！ どうして、こんなことがありうるのか、私の神が、私のために死にたまうたとは？ 何と驚くべき愛！ どうして、こんなことがありうるのか、私の神が、私のために死にたまうたとは？

五今や私は、いかなる断罪も恐れませんが、

主イエスと、主のすべては、私のものなのです。

私の生ける頭（かしら）であられる主において、私は生き、

聖なる義の衣（ころも）をまとい、

大胆に永遠のみ座に近付き、

私のものであるキリストのゆえに、

冠（かんむり）を求めます。

さて、「アメイジング・グレイス」でジョン・ニュートンは、「私のような無頼漢をさえ救いたもうとは！」と述べていますが、彼はかつて奴隸船の船長であったので、彼の深い罪意識を私たちは理解できます。

ところが、チャールズは牧師として奉仕の生活をしていたにもかかわらず、私たちを驚嘆させるほど

深刻に罪に悩み、自分は殺人者や売春婦と同じく犯罪（crime）を犯した人間なのだ——と讚美歌のなかで告白しているのです。もっとも、その箇所は英語の讚美歌で削除されているので、邦訳にはありません。それは讚美歌六二番「主イエスのみいつと」なのです。

これはチャールズの回心一年目の歌であることが分かっています。第一節を直訳します。

千の舌を与えたまえ、私の偉大な贖い主を賛美するために。

私の神であり王である方の栄光と、そのみ恵みが与える勝利を歌うために。

省略されているのはつぎの箇所です。

売春婦たち、取税人たち、盗人たちよ、聖なる勝利に参加しなさい！ 信じる罪人は、救われます、私が犯したような重い犯罪（crime）から。

殺人者や、極悪の仲間たちよ、悪欲と傲慢のやからよ、信じなさい。救い主は、あなたがたのために、私のために死なれたのです。

チャールズは、ほんとうに、ほんとうに、自分が極悪の人間であると信じていたのです。パウロのように、罪人の首（かしら）であると思つて苦しんでいたのが、主イエスが自分のような者のために死にたまうた——ということが、ほんとうなのか、と疑い、また信じることができたときには、驚いたのです。このように深刻な疑いと驚きがみちている讚美歌は、「わが主を十字架の」だけだと思います。

この歌を訳していて私は深く心を刺されました。自分が救われていることに、何の不思議も感じていない私は、十字架の秘義がまだ分かっていないと。

A・E・マクグラスの『キリスト教の霊性』（教文館）を一時間前に読んでいて驚きました。彼がチャールズ・ウェスレーを取り上げた際、この「わが主を十字架の」の全文を紹介しているからです。

《美しき島》と《あめなる喜び》  
——メソヂイスト讚美歌の音楽——  
大学文学部史学科准教授 那須輝彦

ウェスレー兄弟の大衆伝道で大いなる威力を発揮したのが、詩才に富む弟チャールズの書く讚美歌であった。それまで英国国教会で会衆が歌っていたのは旧約聖書の詩編を韻文にした「詩編歌」のみ。当然、「イエス」も「十字架」も出てこない。ウェスレー兄弟は、詩編歌に固執せず、強く個人の感情に訴えかけ、絵画的なイメージに富んだ讚美歌を書き下ろし、説教集会で民衆に歌わせたの

である。たとえば「Lo, He comes with clouds descending! 見よ、主が群雲とともに降り来たる！」といった具合。彼の讚美歌によってキリスト教は初めて、教育を受けていない大衆の心に届いたとさえ言われる。

さてそのチャールズの讚美歌はどんな音楽で歌われたのか。ジョンが著した「讚美歌歌唱の指針」第四項にはこうある。「意気揚々と歌いなさい。眠ったようになら



故郷エブワースの司祭館にあるチャールズの肖像画と彼の譜面台。

ず元気に声をあげなさい」。そして最後の第七項にいわく、「何よりも、霊的に歌いなさい」。要するに、情性に流れず、真に祈りのこもった「篤い」会衆賛美をめざしたのである。詩編歌で使われていた、四分音符が規則的に並んだような単調で四角四面の曲は、ジョンの意にはそわなかった。当時の詩編歌は、一行ずつ指導者が先唱し、会衆がそれを復唱する形で、しかも恐ろしく遅いテンポで歌われていたので、なおさらであった。

のオペラなど、世俗の音楽を借用してゆく。そもそもチャールズの讚美歌自体、詩編歌で支配的だった弱強アクセントではなく、世俗歌曲に多い強弱アクセントで書かれたものがあり（たとえば先の例だと、口ウ・ヒー・カムズ・ウィズ・クラウズ・デイセンディング）、その斬新なリズム感が、すでに世俗歌のような音楽を指向していた。

譜例一が、実際、当時の讚美歌集で、この「口ウ・ヒー・カムズ」に付けられた譜。旋律は激しくアップ・ダウンし、付点リズムや十六分音符の素早い動きでおおいにスウィングしている。それもそのはず、遊園で使われていた舞曲に、これとよく似た旋律があるという（「讚美歌第二編」五）。英国国教会の保守派は、この軽快な調子に度胆を抜かれ、眉をひそめた。

曲に、これとよく似た旋律があるという（「讚美歌第二編」五）。英国国教会の保守派は、この軽快な調子に度胆を抜かれ、眉をひそめた。

チャールズが最初から具体的にある世俗歌曲のメロディを念頭において書いた讚美歌もある。彼の代表作「Love Dine, all loves excelling 神の愛、あらゆる愛にまさる」こそ、その典型にほかならない。現在の日本では「あめなる喜び」の訳で、四分音符を連ねた着実な歩みの旋律で歌われているこの詩（「讚美歌」三五二番）、実はチャールズが、イギリス・バロック音楽の華、夭折の天才ヘンリー・パーセル（一六五九～九五）の劇音楽《アーサー王》のなかのアリア《美しき鳥》のメロディを念頭におき、その歌詞を生かして書いたものなのである。元歌と讚美歌の歌詞を次頁に併記したのでご覧頂きたい。ブリテン島を「喜びと愛の宿るところ」と賛美したアリアが、我が身に神の愛が宿るようにと祈る讚美歌に生まれ変わっている。英語原文中イタリック表記した個所に両者の対応関係が認められよう。原曲と讚美歌の譜も併記した（譜例二～三）。

調が変わり、リズムも多少変形されているが、パーセルならではの気品に満ちた美しい旋律をたどることができ。

当時のウェスレー讚美歌集には、こうした借用ばかりではなく、書き下ろしの曲でも劇場のアリア風のもの多数あり、家庭ではチェンバロ伴奏などで歌われた。しかしウェスレー兄弟の運動の拠点となっていた礼拝堂のなかには、全会衆にこうした難易度の高い讚美歌を歌わせるところもあり、会衆は見事にそれをこなしたという。「讚美歌歌唱の指針」まで著したジョンの熱意の賜物である。

メソディストの見事な歌唱は定評となった。一七八七年、ある英国国教会の聖職者はほやいていける。「説教で一人が国教会から引き抜かれる間に、音楽で十人がかどわかされる」。そしてついには「歌う」がメソディストの形容詞となり、「シンギング・メソディスト」と呼ばれるまでになるのである。

追記  
二月一八日、ガウチャー記念礼拝堂でのクリスマス礼拝後、チャールズ・ウェスレー生誕三〇〇年記念演奏会を開催します。本稿で触れた讚美歌も実演いたします。ぜひご来場ください。

〔譜例1〕 HYMN 139. 140.

Olivers,  
Lo! He comes with Clouds descending  
Once for favour'd Sinners slain! Thousand,  
thousand Saints attending, Swell thy triumph  
of his Train: Hallelujah, Hallelu - jah  
Hallelujah, God appears; on Earth to reign

《見よ、主が群衆とともに》の譜 (1761)

〔譜例2〕 A SONG in King Arthur.

Arise! Ye of the Ex-cel-sing, Seat of Plea-sure and of Love!  
Some here will chide her Dwelling and her Hall for Cy-prus Court-ship,  
from the Perverse Nation, Care and En-vy will Remove: Jeal-ous-ly, that  
Jeal-ous-ly, and En-vy, that die for Love.

《美しき島》の譜 (1698)

〔譜例3〕 HYMN 198.

Westminster  
Love Divine, all Loves ex-cel-ling, Joy of Heaven, to Dwelling, All thy faith-ful  
Fix in us thy hum-ble  
Earth come down; Mercies crown: Je-su, Thou art  
all Com-pas-sion, Pure, un-bounded  
Love Thou art; Visit us with  
thy Sal-va-tion, En-ter  
eve-ry trem-bling Heart.

《あめなる喜び》の譜 (1761)

FAIREST ISLE from KING ARTHUR

Fairest Isle, *all isles excelling*,  
Seat of pleasure and of love,  
Venus here will choose her *dwelling*,  
And forsake her Cyprian grove.  
Cupid from his fav'rite nation,  
Care and Envy will remove,  
Jealousy that poisons passion,  
And Despair that dies for love.  
John Dryden (1631-1700)

美しき島 《アーサー王》より

こよなく美しき島、あらゆる島にまさる島、  
喜びと愛の宿るところ、  
ヴィーナスもこの島に居をさだめ、  
生地キプロス島の森を見捨てるであろう。  
キュービッドはお気に入りのこの国から、  
煩いと妬みとをぬぐい去り、  
情熱に毒をもる嫉妬も、  
愛ゆえに死を選ぶ絶望をも取り払う。  
ジョン・ドライデン (1631-1700) 作

LOVE DIVINE, ALL LOVES EXCELLING

Love Divine, *all loves excelling*,  
Joy of heaven, to earth come down,  
Fix in us thy humble *dwelling*,  
All thy faithful mercies crown.  
Jesu, thou art all compassion,  
Pure unbounded love thou art;  
Visit us with thy salvation,  
Enter every trembling heart.  
Charles Wesley (1707-81)

あめなる喜び 『讃美歌』352番

神の愛、あらゆる愛にまさる愛よ、  
天の喜びよ、地に降り来たり、  
我らのうちに汝のつましき居をさだめ、  
汝のまことの慈しみをば授けたまえ。  
イエスよ、汝は慈しみ深き、  
清らなる、無上の愛なる主。  
汝の救いもて我らをおとずれ、  
おののく心に宿りたまえ。  
チャールズ・ウェスレー (1707-81) 作